

ヴィクトリア朝詩雑抄：試訳

前川，俊一

<https://doi.org/10.15017/2332778>

出版情報：文學研究. 67, pp.117-149, 1970-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



ヴィクトリア朝詩雑抄

―試 訳―

前
川
俊
一

ドーヴァーの岸边——マッシュュー・アーノルド

今宵 海は静かだ。

潮は満ち、月はさやかに

海峡に照つている。——フランスの岸边に 光が

きらり閃いて、消える。しんとした入江に、英国の断崖が

仄かに光りながら、広大に聳え立つている。

窓辺によりたまえ。夜気が香くわしい。

ただ、海が 月光に白々とした陸に 接するあたり

ヴィクトリア朝詩雑抄（前川）

長々と延びた水煙しみけの線から

耳すましたまえ、君にきこえるだろう

波が引き入れては、打ち寄せるとき 岸辺たかく

投げかえす 小石の群むれの 軋しる音が

ゆるやかな、ふるえる抑揚で

きこえては、止とみ、またきこえ

永遠の悲哀のしらべをかなでるのが。

遠い昔 ソフォクリーズが

エーゲ海の岸辺で これをきき、その音は

彼の胸に 人間のみじめな運命の

濁つた満ち退ひきを想いおこさせた。われらも

それを、遠いこの北海の岸辺できいて

そのひびきのうちに、ある想いを見いだす。

信仰の海もまた

かつては潮満ち、地球の岸边をめぐつて

輝かしい帯を巻いたよう、ひたひたと寄せていた。

しかし、いま 私のきくのは

夜風の息吹に合せて

ひろびろとした、世界のわびしい果ての

はだかの砂利の上を しりぞいて行く

悲しげな、長く尾を引く、引き潮のひびきばかり。

ああ、愛しの人よ、たがいに

まことを尽し合おう。われらの前に

多彩に、うつくしく、新らしく、夢の国のよう

世界は ひろがつているが

まこと、そこには、悦びも、愛も、光明もなく

確かさも、平和も、苦痛を和らげる手段もない。

われらは、闘いか、遁走か、わけわからぬ警報に押し流されて

無知な軍勢が 夜の闇にぶつかり合う

暗い平原に、さながら、立っているのだ。

雛菊——フランシス・トムプスン

薊^{あざみ}が紫の花冠を

芝生から六尺ぬきんで

風通う丘に 釣鐘草の揺れるあたり

おう、浜辺はるかな波濤^{いさぎ}の息吹よ。

丘々は南の州を見はるかし

南のかたに海の夢みるところ

海のそよ風と手をたずさえて

無心と彼女が来たのだ。

はりえにしだの茂みに きいちごが

摘むひとのため 赤く熟^なるあたりを

わたしら子供ふたりは　さまよい歩き、話し合つた
賢^{さか}しげな、たわいのない、子供らしいことを。

彼女は胸までも　花や棘に埋まり
驚きに唇をあけて　聴き入つた。
彼女の肌は葡萄のよう、その脈管は
葡萄酒ならぬ、雪と流れていた。

彼女は知らなかつた、自分の話しぶりや
自分の身ごなしの愛らしさを。
しかし、その日　あれ程愛らしい調べを
喉元にこめた小鳥はいなかつた。

ああ、ストリントンに咲く花はあつた
芝生に、また樹の枝に。
しかし、その日　サセックスの丘に咲いた
一番美しい花は雛菊の花だつた。

彼女の美しさは大地の皺をなめらかにした。

彼女は私に三つのかたみをくれた

面ざしと、可愛い口から流れる言葉と
そして、野にみのるきいちごと。

赤い実と 無邪気な面ざしと

静かな言葉——砂でつづつた糸だ。

しかし、それは私の狂おしい、狂おしい心を
彼女の小さな手に舞い下らせた。

大気のように無雑作に

大空のように無心に立つて

彼女は手に実を摘み

そのうつくしい眼に愛を摘んだ。

うつくしいものほど 過ぎ去りやすい。

澗^{しほ}んだあとに勾いはのこる。

しかし、薔薇を愛した者には

薔薇のかおりは苦痛の種だ。

彼女はなごりおしげに一寸見かえり

それから、日射しの道を去つて行つた――

海の眼には霧がかかり

日はその花片^{はなびら}を散らせた。

彼女は忘却の道を行つた。

彼女は去つて、私に残したのだ

過ぎ去つた一切の別れと

その後の一切の別れの悲しみを。

彼女は私を不思議がらせた、何故になぜ
彼女の悦びに、私のところは悲しみ
甘美さのうちに悲哀がひそみ
悲哀のうちに甘美さがこもるのかと。

なおも、なおも、私は見る気がした、なおも
彼女がやさしく答えて見上げ
実を彼女の手で摘み
愛を彼女の愛らしい眼で摘むのを。

歎きを代価に払うことなしに
何一つ はじまることも、終ることもない。
われらは ひとの苦しみのうちに 生れ
われら自身の苦しみのうちに 死ぬのだ。

ピクニックの跡——トマス・ハーディ

夏、わたしが

海に向かつた丘で

いばらの枝をあつめ

火をおこした場所へ

冬のぬかるみを

ゆつくり登つて行く。

そして、あたりを検分して

立ち去つた場所を見つけ出す

いとも わけなく。

いまはつめたい風が吹き

草は灰色に枯れているが

いまもその場所は

円い焼け跡を見せている——そう

ヴィクトリア朝詩雜抄（前川）

棒切れの、焦げた先^{さき}までも

いま私の立つ

草原^{くさばら}にちらかつている――

その私は、あの日ここに來た仲間の
最後の一片^{ひとかけら}なのだ。

そうだ、私は丁度　昨年のように

いまここにいる。

そして海は、わたしら四人が來たときと

まったく同じように

真直^{まっすぐ}に延びている風変りな汀^{みなと}から、この高みへと
潮風を吹き上げて來る。

――しかし、二人はこの草の丘から

遠くさまよい出て

ピクニックなどない

都会の雑踏のなかにある。

そして一人は――彼女の眼は閉じている

永久に。

歌なき中の歌——デヨーデ・メレデイス

歌をもたぬ、枯れた菅^{すげ}たち。

でも彼等は歌う。

私の胸の中で彼等は歌うのだ

私が通りすぎるとき。

彼等は私の胸の琴線に触れる。

吐息^{といき}をよびさます。

ただ、枯れた菅の音。

私の中で彼等は歌う。

ユリシーズ——アルフレド・テニス

不毛の岩また岩にかこまれ、このひっそりした炉辺で
老いた妻を相手に、無聊をかこつ王のこの身——

貯え、眠り、喰らうばかりで、俺を知らぬ
蒙昧の民に、いづれ公平には行かぬ裁きを
量り、施したとて、何の益があらう。

俺は旅に出ずにはいられぬ。俺は人生を

おりかすまで飲み干したい。俺は陸おかにいるときも

また、千切れ雲の飛ぶ間まから、雨をよぶヒュアデスの星々が

ほの暗い海をさわがすときも、俺を慕う者たちと共に

また、俺ひとりで、存分に楽しみ

存分に苦しんで来た。俺は名を成した——

その筈だ、俺はいつも飢えた心をいだいて放浪をかさね
いろんなもの——都市、風俗、風土、会議、政治——を

この眼で見て、知り、また俺も劣らず

ひとに知られ、ひとみなにほめ称えられ——

また、同志の者たちと共に、遠く、風すさぶトロイの
刀槍ひびく平原に、戦いの喜びを縦にしたのだ。

俺は今までに逢つた一切のものの一部になつている。

だが、およそ経験は、まだ訪れぬ世界が

彼方に輝いて見えるアーチのようなもの

その世界の涯は、こちらが進むにつれて、絶えず後すざり行くのだ。

休止すること、終止符を打つこと、磨かずに錆び

使わずに光を失うことは、何とつまらぬことか。

ただ息をしているのが人生ではあるまい。ひとの生涯は

いくつ重ねても、まこと短いものなのに、一度きりの俺の人生は

残るところ僅かだ。しかし、一刻、一刻が

かの永遠の沈黙から救い出され、未知の事物をもたらす

新たな何物かだ。だから、たとえ三日でも

俺を——沈み行く星のよう

人間の考えの限界を越えて

知識を求めてやまぬ、この老いたる精神を
ただしまいこんで置くのはよからぬことだ。

これは我が子、俺の血を分けたテレマコスだ。

彼に王笏とこの島をゆずろう――

あせらず、注意深く、この荒くれた民を

温和になるよう、次第に手なづけて

役立つ善良な民に導き、この厄介仕事を果たす術を

充分心得た、俺の氣に入りの男――

その働きは主に日常のつとめに注がれ

やさしく母の面倒を見ることを怠らず

俺がいなくなつても、我が家の神々に

崇敬の誠をつくす、非の打ちようのない男だ。

彼には彼の、俺には俺の仕事がある。

あそこが港だ。船には帆がはためいている。

薄闇を透かして広々と海が見える。舟人たちよ

苦勞と、活動と、数々の想いを俺と共にし
雷雨も、陽光も、いつも冗談めいた

陽気な気分迎え、自由な心と自由な額を

立て通して来た者たちよ、おまえたちも、俺も老いた。

だが、まだ老齡にも それにふさわしい栄誉と労苦がある。

死ねば万事終りだが、終るまでに、まだ何か

神々と競つた人々にふさわしい

豪気なことが仕遂げられそうだ。

岩間から灯がまたたきはじめた。

長い一日も暮れ、月はおもむろに昇り、海一面に

潮騒の音がきこえる。さあ、同志の者たちよ

新たな世界をさがし求めるに、まだ遅すぎはしない。

乗り出そう。整然と各自の持ち場について

擧音高く海を漕ぎ行こう。俺の目指すところは

日の没する彼方、西の星々がすべて

海に沈むあたりを越えて、死に至るまで船を進めることだ。

われらは大海に吞まれてしまうかも知れぬ。

それとも、かの幸福の島にたどりついて

旧友の大アキリーズにめぐり逢うかも知れぬ。

多くを勝ち得たが、尚多くがあとに控えている。

われらに、天と地を動かした、かつての力はないが

いまに失せぬものを持ちつづけている——

常に落着きを失わず、時と命運のため、衰えはしても

不屈の意志で、たたかい、もとめ、見いだそうと

努めて止まぬ、大丈夫の^{ますらお}ころを。

アンドレア・デル・サルトー——ロバート・ブラウニング

前註

アンドレア・デル・サルトー（一四八六—一五三二）はフロレンスの画家で、画技卓抜のため「欠くるところなき画人」
「Faultless Painter」の異名を得た。彼の弟子ヴァザーリの画人伝（初版）は次のように伝えている。アンドレアはルクレ
ツィアという美貌ながら性質よろしからぬ女を妻にし、聖母などを描くとき、この女をモデルにした。一五二八年フランス
国王フランシス一世の招きでパリに赴き、王の庇護の下に画技をふるつた。ところが、故郷に残して来た妻が帰国をせまる
ので、じきにフランスに戻るといふ条件で、一旦帰国をゆるされた。その際、イタリーの名画を買って帰るよう、王から多

額の金子を托された。ところがアンドレアは帰国後、その金に手をつけて自分の家を建て、そのため日蔭者の生活を余儀なくされた。尚彼は、妻にはつくししながら、両親を貧困のうちに死なせてかえり見なかつたという。

ブラウニングのイタリー滞在当時、フロレンスのピッティ美術館に、アンドレアの筆になる彼の夫妻像が懸かつていた。ブラウニングは、英国のある友人から、この夫妻像の写真を手に入れるよう依頼されたが、入手出来なかつたので、一篇の詩を書き上げて、替りに贈つたという。それはヴァザーリの伝記中の上記の記事と、ブラウニング自身がアンドレアの数々の作品から直接に得た感銘とを、この夫妻像に投入して成つたものであつた。以下に訳出する作品が即ちそれである。

でも、もう諍^{いさか}いは止^よしにしようよ

ねえ、ルクレチア、今度だけ勘弁しておくれよ。

万事おまえの望み通りにするから、ここにおすわり

(顔は向いたが、さて、こころはどうかな)。

それでは、おまえの友達とやらのために仕事をしよう、大丈夫だ。

注文通りの画題を注文通りの描きかたで扱うよ。

期限も報酬も先方の申し出通りだ。

そして、お金はこれ、この可愛らしい手に握らせてあげる。

その手が次に、この手を握つてくれればね、よいかね、やさしくだよ。

ああ、きつと気に入るさ——だが、それはおまえ、明日にしておくれ。

私は、おまえが思っているよりもずつと疲れている時が多いのだよ。

今宵はいつもよりひどいようだ。だから、あれさ

若し——すまないが——窓のそばに私をすわらせて

おまえの手を私に握らせながら

夫婦の間によくあるように、ひとつ心にとけ合つて

この黄昏時^{たそがれ}が暮れ終るまで、静かに、静かに

半時間もフィエゾレ山を眺めさせてくれたら

私も明日は、いつもと変りなく、ほがらかに、元気に

起き出して仕事にかかれるだろうよ。そうして見ないか。

おまえも明日になれば、そうしてよかつたと喜ぶにきまつてゐる。

おまえの柔かな手は女そのものだ。

そして私の手はそれを抱き^だすくめる男のあらわな胸だ。

時間だつて無駄にはならないよ。どうせおまえには

手がける筈の五枚の絵にすわつてもらふのだから。

モデル代がたすかるからね。そう、その顔つきを変えないで——

靈感^{こわく}のとくろを巻く、わたしの可愛い蛇よ。

——どうしてこんな素晴らしい耳に穴をあけて

真珠などつけるのか。おう、なんてうつくしい——

私の顔、私の月、私の、万人の月

その顔を誰も眺めて自分のものと呼ぶが

そして多分、次々と眺められてもいるだろうが

見たところ——誰のものでもない——でも、とてもかわゆい。

おまえ、につこりしたね。うん、それで絵が生まれたよ。

われわれ画家仲間という諧調が成つたのだ。

一様の灰色が凡てを銀の色沢に変え——

一切が黄昏のうちに、おまえ、私をくるめて

——おまえは私を夫にして得意のときの姿

(わかつてる、そういう時は過ぎたのだ) しかし私はいつも同じこと

私の青春、希望、私の芸術、すべてがくすんで

向うのフィエゾレ山の落着いた、地味な色に見合っている。

礼拝堂のいただきから鐘の音がひびいて来る。

修道院の塀が長々と道の向うにのびて

その内側の樹は安全にかこわれ、一きわみつしりと繁っている。

最後に残っていた僧が庭園を去って行く。日脚は衰え

秋は深まり、秋色が一切を被っている。

何かつて——一切があるかたちにまとまっているのだ。

私の作品も、私の生涯も、私が生れついであるところのものなすところのもの、一切が、一枚の黄昏の絵のように

ひと目に見渡せるのだ。なあ、おまえ、私等は神の御手にある。

神がわたしらに送らせる生活は、思えば奇妙なものさ。

わたしらは至極自由に見えながら、しかと枷をはめられている。

どうやら神様はめたらしい。手をつけずに置こう。

たとえばこの部屋だが——ふりむいて御覧——

わたしらのうしろにある全作品を。おまえは私の芸術など

わからないし、わからうもしないが

人の噂ぐらいはきいて見てはどうかね。

ほら、戸口から二番目の、あの下絵だが

——おまえ、あれは大したものだ、下絵はかくあるべきだね——

見よ、聖母を、と敢てわたしは言いたい。

私は、自分の知るもの、自分の見るもの

心底から望むもの——その深さが問題だが——

それを画筆で実現出来るのだ

しかも易々と——完璧に、と言つても

まあ法螺にはなるまい。おまえも聞いたように

現に、法王代理さまが先週そう仰つしやつたのだから。

フランスでの評判だつてその通りだつたよ。

何にしても、易々とだ——いまの凡てが。

はじめにスケッチや習作などしない。そんな段階はとつくの昔に過ぎた。

私は多くの人が生涯夢見ることをやつてのける。

夢見るつて——果たそうと努め、苦しみぬいて

そして果たせないことさ。そんな連中がこの町に少くとも二十人

おまえの両手の指を二度数えるほどいるのだよ。

おまえは外の連中がどんなに苦勞するかわかるまいが

この連中は、おまえが不注意に通りすぎて裳裾でよごした

あの程度の小品にさえ、さんざ苦勞して、しかも

出来栄は遙かに劣るという人がいるよ——

(その人の名も知つてゐるが、どうでもよいさ)——遙かにだよ。

だが、ルクレチア、その劣るのがまさるつてことだ。私は裁かれたのだ。

悩みぬき、動悸をうち、滞りがちな彼等の頭脳か

心臓か、何かには、いつも低く脈うち

てきばきと動く、私のこの職人の手をうごかすものよりも

神により近い光が燃えているのだよ。

彼等の作品は地に落ちるが、彼等自身は

私にはとどざされた天に、何度も届いている。

彼等は舞い戻つて来ても、ひとには何も話せないが

たしかに天国に入つて、そこに座を占めるのだ。

私の作品はもつと天に近いが、私はここを離れない。

こういう連中の血の烈しさ、たつた一言

讃められても血がたぎり、貶けなされても血がたぎる。

私の画業は己れにはじまつて己れにかえる。

自分のやることがわかつているから、ひとが貶けなそうと

讃めようと、動動じない。向うに見えるモレロ山の

輪郭がおかしいとか、色合いが変だとか

あげつらう人がいたとて、それが何だろう。

線のひきかたがよいの、釣つり合いがよいのと、それが何だ。

何と言われようと、山は構かまうものか。

ああ、しかし人間の狙いは、手のとどこものを超えねばならぬ。

でなければ、天は何のためにあるのか。私の芸術は

すべて銀灰色で、平静で、完璧だ。だからいけない。

私は自分の望むもの、自分の手の届くものを知っている。

しかし、知つて歎いたとて何になる――

「自分が、自分と別の人間と、二人であつたら

その頭脳は世界を見下したろうに」と。それにちがいはないが。

そこに懸かつているのは、五年前になくなつた

ウルビーノ生れの、高名の若者の描いた絵だ。

(模写で、ゲオルグ・ヴァザリーがくれたのだ)。

ところで私には、彼がどんなにして、あれだけやれたか、想像がつくよ

王様や法王がたの見まもるなかを

上天の加護のあるよう、己れの技を通じ

技を超えて、心魂を傾けているさまが。――力が足りないのだ。

あの腕の描き方はよくない――しかし、そこだよ――

それは描線として赦し得るあやまりなのだ。

言わば肉体の誤りとでもいうか、魂はまちがつていない。

彼の狙いは正しい——それは子供にだつてわかる。

それにしても、何という腕だ。私なら直せる。

しかし、全体の働き、洞察と想像の高揚——

私など、とても、とても。何故そうなのか。

おまえが私にそれを促し、私に魂を入れてくれていたら
私等はラファエルの高さに達したろう——私もおまえも。

いや、私の可愛いひと、おまえは私の望む一切を与えてくれたと、私は思うよ——
私には過ぎるくらい、そうだ、幾層倍も。

しかし、もしもおまえが——おう、その完璧の額と

完璧の眼と、完璧を上廻る口と

小鳥が獵人の笛につられて畏に引きよせられるように

私の魂にひびいて来るおまえの低い声に加えて

これら一切に加えて、おまえが魂を持ち込んでくれていたら——

そんな女もいるのだ——その口がこう励ましてくれていたら——

「神と栄光を。金儲けなど、どうでもいいの。

現在など、未来と比べたら、何でもないわ。

ミケランジェロと並んで、名声に生きるのよ。

ラファエルが待つています。三人そろつて神のみもとへ。」

私もおまえのためにやり遂げたろう。そう思えるのだ。

いや、そうではなからう。一切は神の思召^{おほしめ}しだ。

それに、促^{うなが}すみなもとほ魂自体にある。

それだけがものをいうのだ。私はなぜおまえが必要なのか。

ラファエルやミケランジェロはどんな妻を持つたというのだ。

この世では、ことを成し得る者は成さず

成そうとする者は力足りない、そういうものさ。

しかし、その意志を持つことは相当なことだ——その力を持つことも。

こうして、われら半人前の輩^{ともがら}は苦悩する。つまるところ

最後に神が、償^{つぐな}いたまい、罰したまうのだ。

この審判が厳正ならば、私が現世で不遇なことは

私の安全を請^うけあうものだ。

実のところ、私は長い間、貧乏でさげすまれて来た。

私は終日家から出られないのを、おまえは気づいているかどうか。

パリの貴族がたに出合うのが嫌^{いや}なのだ。

すれちがつても、よそを向いてくれればこの上ないが

話しかけるひとがいるのだ。何事も忍ぶ外ない。

話しかけるのも無理はない。フランス王に初めての拝謁。

それからフォンテンブローでの長い宴樂の一年。

あの頃は私も地を離れ、常日頃ラファエルの

まといつてゐる榮光を、わが身に帯びる時もあつた

仁慈の大王のにこやかな眼ざしを浴びて――

陛下はあごひげか、それとも、微笑を含んだ

唇の上に軽くひねつた口ひげに指を触れながら

片腕を私の肩にまわしたり、私の首を抱いたり

私は王の金鎖の触れあう音を聞き

王の息づかいを身近に感じながら誇らしげに筆をつかい

廷臣はすべて王をとりまき、そして王の眼つきと

――フランス人の率直な眼つきだ――王の燃え輝く心を体して

わたしを見つめるし、私の手はこれらの人に励まされて始終動きつづけ

そして、一番嬉しいことだが、その向うにこれ、この顔が

背後にこの顔が、私の仕事を見守つていてくれるのだ

仕事のおしまいに、最後の御褒美を授けようとして。

私が豪華な生活にひたつた、結構な時代ではなかったか。

そしておまえさえ急^きかなかつたら——いや、わかつてる——

もう済^すんだことだ——そうしてよいと、私の本心^{こころ}が嘯^{ささや}いたのだ。

生活が華^は美^でにすぎた、灰色でなくて金色に。

私は、穀倉^{こくぐら}の四壁を己^{おの}の世界にして

日が照つても、飛び出す気などさらに起らぬ、眼の弱いこうもりだ。

あのほかに行きつく道はなかつたのだよ。

おまえが呼んだので、おまえの胸に帰つて来たわけさ。

私の終^{つひ}の勝利はそこにたどりつき、やすらうことにある。

ところが、勝利のまえにたどりついたのだから、損はあるまい。

私の手でおまえの顔をその金髪^{がみ}の額^{がく}にはめさせておくれ。

私のもの、うるわしのルクレチアよ。

「これはラファエル、あちらはアンドレアが描^かいたのだ。

お祈りをするにはラファエルの画がふさわしいが

何といつても、他方の聖母は自分の妻なのだから——」

こう言つて、人は弁護してくれよう。私は両方の画を

おまえの眼の前で見くらべて見たい。そうすれば

私の方が画才にめぐまれていることがはつきりするよ。

というのも、ルクレチアよ、これは、うそではない

ある日、ミケランジェロその人がラファエルに

言つた言葉だよ——私はもう何年もまえにきいたのだ——

（あの若者がローマ中の人々に見せるため

宮殿の壁に自分の想念を火焰のように吹きつけ

そのため、心が高揚しきつていた頃の話さ）

「友よ、誰からも相手にされず、フロレンスの町を

ほつつき歩いている、しがない男がいる。

その男が、君のように、法王や国王の励ましを受けて

構想をねり、筆を下したならば

君のその額に冷汗をかかせるだろうよ。」

ラファエルにだよ——実際、あの腕は描きそこないだ。

大人気ないが——おまえに見せるだけだよ——

チョークをとつておくれ——ちよいと、ここの線はこう引くのだ。

そうとも、しかし魂は——流石はラファエルだ——消してもらおう。

しかし、もし彼が真実を語つたとすれば

(彼は誰だと——ミケランジェロじゃないか。

おまえは、そんなことまでもう忘れたのか。)

事実、そういうチャンスがあつて、とり逃がしたとしても

おまえが——有難がるよりも——喜んでくれるかどうか、それが気にかかる。

まあ喜んでいるとしよう。事実、にこにこしているのだから。

今日は丁度一時間だつた。もう一度にこにこしてくれないか。

おまえがそうして毎晩そばに坐つてくれば

私の仕事ももつとはかどるのだよ、わかるね。

つまり、もつとお金はいつて、もつとおまえにあげられるのだよ。

御覧、もうとつぷり暮れてしまつた。星が出ている。

モレロ山も見えなくなつた。見張りの燈火が塀のありかだ。

キウ鼻は名前通りの声で鳴いている。

おまえ、窓を離れてこちらにおいで——もう、はいろいろよ

私等が楽しく暮らすつもりで建てた

陰気な小さい家の中に。神は正しかつた。

フランス王は私を赦ゆるして下さるかも知れぬ。夜などよく

眼を疲らせて、画から眼をあげると

壁の煉瓦が一つ一つ、漆喰の色でなくて

はつきりと、眼を射るような明るい黄金色に輝き出すのだ。

王のあの金貨の色だ。あの金でこの壁を塗つたのだよ。

おたがいに関し合つて行こう。どうしても行くのかい。

例の従兄弟がまた来たのか。外で待つてゐるのだと。

是非会いたいつて、私と一緒になくておまえだけに。幾度か用立てたお金は――。

賭けの借りがまた出来たつて。にこにこしたのはそのためだつたのか。

よし、その笑顔で私を買つて貰おう。もつと微笑がふり撒けないか。

手と眼と、それに幾分なりと氣力のつくくあいだ

私は仕事を売り物にしよう。一体いくらに売れるのか。

私は自分のたのしみの代価を払うよ。ただ、どうか

黄昏の残りの時を、ここに坐つてすごさせてほしい。

――おまえは怠けるといふが――とつくり考えて見たいのだ

私がいま一度フランスに帰れるものなら

もう一枚――一枚だけでいい――どんな風に描こうかと

聖母の顔をさ――今度はお前のでない。――おまえを傍に置いて

彼等が――いや、ミケランジェロが――わたしの仕事の総体を

評価し、その素晴らしさを語るのをきかせたいのだ。

おまえ、いてくれるね。明日はおまえの友達に義理が果たせるよ。

あいつの家の廊下にふさわしい題材をえらんで

一気に肖像を仕上げよう。——いいよ、いいよ。

あいつが渋るのなら、それに一点か二点

おまけをつけてやろう。これだけあれば

その従兄弟とやらの気紛れの尻ぬぐいには充分だ。

それに、もつとよいこと、私が一番気にかけることだが

おまえの褶襟に使う十三スクーディまでもひねり出せるのだよ。

どうだ、おまえ、お気に召したかね。ああ、だが、あいつは

あの従兄弟めは、おまえをもつと悦ばせるために一体何をするというのか。

今晚、私は老人らしく安らかな気持になつた。

私は後悔しない。境遇を変えようとは尚更思わない。

私の過去の生活は厳としてあるのだ、変えることがあろうか。

フランス王への忘恩の振舞いにしても——なるほど

私は王の金を預かり、誘惑に負けて

この家を建てる不埒ふらちを働いたが、それだけのことさ。

私の父も母も、貧困のうちになくなつた。

しかし、私に貯たくわえなどあつたか。そう易々やすと

金がたまるものか。ひとそれぞれの運命に甘んじることだ。

彼等は貧しく生まれ、貧しく生き、貧困のうちに死んだ。

私も若い時分はせつせと働いたが

収入は豊かでなかつた。誰か孝行息子に

私の描いた二百点の絵を描かせて見るがよい——やらせて見ろ。

たしかに、現世には何か釣合つぎあいをとらせるものがある。そうだ

おまえは充分に私を愛してくれた、今晚そんな気がする。

この世ではこれで満足せずばなるまい。この世で何を得ようというのか。

恐らく天国では新しいチャンスがあるう、いま一度のチャンスが——

新ジェルーサレムに四個の広い壁

その一つ一つを天使が間竿かんざで割りあてるのだ

レオナルドとラファエルとアンジェロと私が

それを描き埋めるために——はじめの三人に妻がなくて

私にはある。それで——彼等はまたも私を負かす

ルクレチアがあるばかりに——それも私の選んだ道だ。

また従兄弟の口笛か。行きなさい、私の可愛いひと。